

- くっつけることを最初に可能にした天然アスファルト -
道路舗装や防水用・電気絶縁用などに使用されるアスファルトですが、私たちがふだん目にするのは人の手によって原油を蒸留した後の残渣がほとんどです。しかし、自然界には天然のアスファルトが存在しており、人類は古くからこれを接着剤として用いてきました。

縄文時代の日本では天然アスファルトを使って石を棒に付け槍にしていたことがわかっています。

縄文遺跡の土偶には、欠けた部分を天然アスファルトで補修した例も見られます。

天然アスファルトが大規模に利用されたのは紀元前3800年頃のチグリス・ユーフラテス河流域、現在のイラクに誕生したメソポタミア文明です。ここは石油の大産地、天然アスファルトは豊富にあり、人々はモノとモノをくっつけるために利用していました。

イラクのウル地方から出土した「ウルのスタンダード」は紀元前2700年頃の壁画ですが、貝殻や宝石が天然アス

ファルトで接着されています。古代メソポタミア文明の技術を継承した古代バビロニア帝国では、天然アスファルトによってレンガを固め、巨大で堅牢な建造物を数多くつくりました。また、道にレンガを敷き詰めてそれを天然アスファルトで固定することも行っていました。旧約聖書に出てくる「バベルの塔」は、古代メソポタミアの人々の間で語り継がれていた物語が原形とされていますが、その実在が古代バビロニアの首都・バビロンで確認されています。天然アスファルトの固着力が、当時としては驚異的な建造技術を可能にしたのです。

なお、天然アスファルトは原油が地表近くで揮発成分を失い重質部分を残したものと考えられています。

上記は「粘着テープ物語 - 歴史編 - 」日東電工株式会社発行(1998)の内容をもとに一部百科事典による記述を加筆したものです。

(東海ゴム工業(株)長野悦子)